

月例研究会 (2013年11月27日)

日本製糸業における 労務管理の生成とジェンダー

榎 一江

本報告の課題は、労務管理の生成にジェンダーがどのように作用したのかを日本製糸業の事例を通して考察することである。ここで労務管理の生成とは、科学的管理などの試みを通じて現代的な組織と管理手法が生み出され、定着する過程をさす。通常その過程は、現場の労働集団や職長・請負人から権限が奪われ、事業主が下級監督者から提供された情報に基づいて一元的な管理を貫徹してゆく過程と理解されている。しかしながら、我々は、その道のりがそれほど単純でなかったことを前提に出発しなければならない。『大原社会問題研究所雑誌』に掲載された特集「徒弟制の変容と労務管理の生成——20世紀前半における経営革新とその担い手」は、19世紀末から20世紀前半にかけて、製造業大企業において、管理、技術、教育訓練面での革新の担い手がいかなる職業経歴を経て現場に生成し、育成されたのか、また、彼らが上級経営者および現場の労働者との間にいかなる位置を占めたのか、を問うものであった。この議論を踏まえ、日本製糸業の事例を考察する本報告は、検番や教婦の機能変化に注目する。

まず、「日本製糸業における管理問題の生成」として、諏訪製糸業における検番の役割、郡是製糸における教婦の位置づけを概観し、明治期の検番・教婦が製糸経営内において占めた独特の地位を確認した。そして、男性の検番に対する専門教育がより上級の蚕業教育へと展開していったのに対し、女性の教婦を育成する専門教

育が公的機関を通して発展していく過程を概観した。次に、「生糸生産の変容と製糸教婦」では、生糸需要の変化に伴う生糸生産の変容を踏まえ、新たに生じた管理問題と製糸教婦の拡充を確認した。郡是製糸の事例から、教婦数の増大とともに経営内での役割が限定されていき、創業期の教婦とは全く異なる存在に変容していたことを明らかにした。同社で確認された教婦の位置づけをめぐる変化は、農商務省による統計調査においても確認できる。「農商務省による作業監督者の把握」では、全国製糸工場調査等において、教婦の位置づけが変容する過程を跡付けた。

日本製糸業において、明治期の検番や教婦は全人格的に生産に責任を負う存在であり、単なる作業監督者ではなかった。1920年代に労務管理の生成がみられた製糸業において確認されたのは、技師・技術者という上級管理者と現場の作業監督を担う者との機能分化であった。男性の検番が比較的早い段階で、より上級の技術者とは異なる作業監督者としての地位を確立したのに対し、もともと技師に相当するとみられた教婦は、変遷の末、作業監督者(女)となり、より上級の技術者のもとで現場を管理・監督する存在となった。多くの女性が従事した教婦は、職業婦人の一つとして定着したが、その上位には男性の監督者が置かれ、その役割も限定されていった。労務管理の生成にともない、女性管理者としての位置づけを得た教婦は、決して現業長や工場長といった職位につくことのない下級管理者となることによって、望ましい婦人の職業として一般化したのである。その意味で、労務管理の生成にともなう管理者層の階層化は、管理者のジェンダーと不可分に進展したといえよう。なお、本報告は2013年度大原社会問題研究所叢書の一部となる予定である。(えのき・かずえ 法政大学大原社会問題研究所准教授)